



Title	メタファーとメディアの関係性に関する一考察：「接続 / 切断」と「同一化 / 差異化」の相互性
Author(s)	鈴木, 純一
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 68, 95-108
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58530
Type	bulletin (article)
File Information	05_Suzuki.pdf



[Instructions for use](#)

メタファーとメディアの関係性に関する一考察 ——「接続／切断」と「同一化／差異化」の相互性

鈴木 純 一

I. 問題意識

本考察は、「メタファーとメディア」の相互作用ないし相互依存的関係についておこなわれた研究の概略的な報告としての性格を有している。研究の基本的な発想は、「メタファーとメディア」の機能的な類似性に発している。両者には、複数の表現（単位）を、そしてそこから引き出しうる複数の意味作用を、「接続」ならびに「切断」する機能がある。接続とは、複数の表現を何らかの同質性を基礎として繋ぐこと＝同一化による関連付けと、暫定的に、見做することができる。また切断とは、複数の表現に対し、何らかの異質性を根拠にした区分＝差異化、あるいは関連性を認めないこと、と一応考えることができる。この「接続と切断」という（一見）相反する機能が、テキスト等の表現の意味を連続的に、あるいは転換として継続的に生産し、また受容されるのに極めて重要な役割を担っている。「差異化／同一化」および「接続／切断」という二つの機能の協働性とテキスト再生産メカニズムとの関係である。

ところで、この両者の機能の現れる（可視的になる）レベルは、第一義的には、当該の表現が受け取られる場、観察される場においてである。ある表現が、生み出される場を一次観察のレベル（ここでも「観察」というオペレーションは不可欠）とするならば、それらの表現が接続されたり切断されたりする場＝メタファーないしメディアとして現れ、受け取られる場は、二次観察のレベルということが可能である。この二つの機能と二つの観察レベル、これが本考察の基本的なフレームとなっている。

以上が理論的な観点だとするならば、具体的な分析対象の中心としたのは、近現代ドイツ語圏における思想・文学・美学・学問・批評等のテキストである。これは、筆者のこれまでの研究の継続性という関係もあるが、それ以上に、前述した二つの二重性（接続と切断、および一次観察と二次観察）から現れる特性が、それらのテキストに極めて濃縮された形で表れているのではないかという仮説が要因になっている。後述するが、ニーチェやフッサール等の思想家、マンやムジル等の文学者、社会学者ウェーバーや批評家ベンヤミンのテキストには、少なからず、無意識的にせよ（意図しない結果だとしても）、このような二重性現象を見出すことができ

る。それどころか、テキストの意図的な展開の方法論としても機能させられているかのように思われる場合もある。また、そのようなメカニズム自体も再帰的にテキストの対象にされると考えられるのが、20世紀の社会学者ニクラス・ルーマンのシステム論の記述である。

比較の対象として、あるいは、メタファーとメディアの関係性にとって特徴的な現象を例示ないし説明するために、それ以外の地域や言語圏、あるいは別の時代のテキスト、芸術作品なども分析の対象として入っている。現代日本におけるアニメ作品や、古代から伝統的に継承されてきたユダヤ教テキストの扱われかた、音楽芸術を言語的に表現する体系的な方法論の試みなどがそのような事例である。いずれにせよ、先にあげたメタファーとメディアの関係性に関する理論的な仮説は、このような具体的な分析によって、補強、部分的修正、あるいは新たな視点の獲得にもつながっている。いわゆる、理論構築と具体的な対象分析のフィードバックの効果が、本考察には反映されている。

II. メタファー

メタファーに関する研究史は極めて長い期間にわたっており、また時代の関心に応じて様々な領域において研究の対象とされてきた経緯から、多様な方法論の試みがあり、その全体像を俯瞰することは難しい。が、大雑把な傾向として次の点は指摘できるであろう。すなわち、そのアプローチの視点が、表現効果をテーマとするレトリック論（対象中心）から、人間の情報処理能力と結びついた認知論（観察者中心、あるいは対象との相互作用中心）へと移行してきたという点である。

前者は、アリストテレス以降の修辞学、文学、意味論の分野で、重厚で多様な研究の積み重ね（紆余曲折）がある。ただし、その伝統の中で、比較的安定したフレームとなっていたのが、ある表現が「字義どおりの意味」から「隠喩的な意味」へ転用されるという考え方である。とりあえず「本義／転義」と称されるこの構図では、「本義」とあらかじめ密接なつながりを持つ存在物ないし事象のリアリティが前提とされており、その保証のもと、事後的に、「転義」が可能となる。すなわち、抽象化された意味と偶然的な類似性に基づく「別の」事物への転用であると考えることができる。したがって、この意味におけるメタファーは、既に別の本来の表現を本義として持つ事象に対して用いられる転義の効果に重点を置く、技術的側面が強調されている¹。

それに対して、外界（世界）把握の原理的な観察方法としてのメタファーという考え方を採れば、意味として現れる事物や事象はメタファーとともに初めて可視的になる。レイコフが繰

1 ポスト・モダン派の批評家の代表と見做されているド・マンにおいてもこの考え方が残っている。ポール・ド・マン『読むこととレゴリー』（土田知則訳、岩波書店、2012年）参照。

り返し強調した「経験の構成」のツール、あるいはそれを「理解可能で体系的なもの」へと転換するメカニズムの中に、このメタファーの核心がある。この考え方を推し進めれば、我々人間の認知的な能力を構造化し、可視的なものとして構成し、世界との関係性を立ち上げる、あるいは再構成する、といったような創造的な方向性へとメタファーは繋げられるであろう。すなわち、身体・自然・物理に拘束されている我々が、対象となる世界を記号化し、創造的な（想像的な）扱いを可能にするのがメタファーの核心的な機能であるとされる²。

本考察のメタファー観は、基本的にこのレイコフ的な考え方と重なりあっている。すなわち、観察者が世界を構成し、それによって体系的な、あるいはシステム的な認知を可能にするために欠かせない原理としてのメタファーという考え方である。ただし、次の二つの点での留保がつく。

まず、この考え方は、アリストテレス的なメタファー理解を完全に排除するものではない、という点である。メタファーは、既にメタファーとして現れた表現に対しても適応されうる。言い換えれば、既にメタファーによって何らかの形で記号化された表現も、さらなるメタファー的認知の対象となりうるということである。このことはいわゆる「死んだメタファー」、すなわち修辭的な効果を既に失い、「転義」であることも意識されなくなり、擬似的に「本義」としての役割を果たすようになった表現に対しても、その世界（再）構成的なメカニズムを発揮するという意味している。いわば、新旧二つのメタファーが重ねあわせられ、さらなる更新を進めていくかのような事態もありうる、ということである。

もう一点は、第一点と関係するが、「身体・自然・物理」的な条件が、構成的なメタファーを原理的に規定しているという点への留保である。このメタファー観に関しては、本考察は一定の距離をとっている。確かに、「ヒト」が観察者として外的世界を把握するためには、「ヒト」の自然的・物理的・身体的な、すなわち実体的な特性が制約であると同時に基本的なツールとならざるをえないのは、「自然」な考え方であり、またそのことを否定する（否定しなければならぬ）根拠はない。しかし、現象としてのメタファー研究は、そのような「生物学的」視点に常に支えられていなければならないということもない。世界を再構成するメカニズムとしてのメタファーは、そのような制約をいわばカッコに入れて、テキストやアート作品等、表現形態、そして「観察」という構造そのものの論理に従って分析することも可能である。仮に、その背景としての「ヒト」の身体的な制約への還元が説明可能であったとしても、それが不可欠とは言えない、ということである。もとより、起源としての身体・自然・物理を想定すること自体もメタファー的な表現の観察メカニズムなのである。この自己言及的ないし再帰的な構造は、ニワトリと卵のような循環的な関係にあり、論理的には最終的な決着がつくものではない³。

2 ジョージ・レイコフ／マーク・ジョンソン『レトリックと人生』（渡部・楠瀬・下谷訳、大修館、1986）参照。

3 デリダのメタファー論参照。ジャック・デリダ『哲学の余白（下）』（藤本一勇訳、法政大学出版局、2008）。

ゆえに本考察におけるメタファーへの関心は、以下のような点にまとめられる。メタファーには、表現機能として、明示された関連（接続）と情報としての伝達（理解としての観察）、そしてそれらの構造化（意味としての観察）という一般的なプロセスがあるが、しかし、その裏返しとして、明示されない関連（切断）も潜在的に存在するという点、また、その両者のいずれかが顕在化する場合、それはどのような要因によるのかという点、これらを表現と観察という現象内部の論理に従っての解明する点にある。メタファーの「接続／切断」という二重性は、「同一化／差異化」と一時的には対応する関係にあるが、しかし、両者は時間的なずれを伴いながらさらに二重化されていく。これは従来の「本義と転義」のずれと重なると考えられるが、この相反する運動を、世界把握（世界表現）の中心的なメカニズムとして捉えられるだろうか。このことは、後にメディアの核心となる機能と結びつけられるであろう⁴。

ところで、メタファーの「同一化／差異化」の二重性は、観察視点に応じて、対象化され、体系化され、また場合によっては、意図的に使い分けられることもある。メディア的に表現すると、この「接続／切断」を誘発する要因となる意味転換は、静的に固定された意味の「重ね合せ」としてではなく、常に位相をずらしながら意味のネットワークの総体をも変化させ生成していく「振動」として捉える事ができるかもしれない。次のようなメタファー観が示唆的である。

「(…)これはいさか大げさに言えば、既存の日本語から新たな日本語への言語変化に他ならない。そして隠喩とは、その言語変化を生み出す仕掛けなのである。(…中略…)デヴィッドソンは隠喩のこの正体を見てとっていなかった。(…中略…)それゆえ、『山が笑っている』という発言のもとに、同時に字義どおりの意味と隠喩的な意味を担わせようとするのは、隠喩に対する誤解でしかない。隠喩とは、いわば二つの言語にまたがる運動の名称である。(…)」⁵

以上、ここまでの視点と考察を、暫定的に次のように展開しておく。「異なるものの一時的重ね合わせによる意味の二重化状態」——古典的には「本義／転義」の差異として構造化されていたメタファーのこの原理的特質は、その先に「異なるものの同一化（結合）あるいは差異化（切断）」という観察操作のさらなる（新たな）選択を要請している。またこの連続するメタファー的観察は、この観察操作そのものも観察対象へと化しながら、常にメタレベルの観察(二

メタファーへのテキスト論的な批判のもと、自己言及パラドクスを意図的に誘発し、いわゆる脱構築的な無効化を狙っている。

4 例えば千葉雅也『動きすぎたはいけない』（河出書房新社、2013）をメディア論としてとらえれば、「切断」が強調されている。

5 野矢茂樹：『語りえぬものを語る』、講談社、2011、435頁。

次観察)へと移動し続けることをも、含意している。

III. メディア

「メディア」は現代の社会研究の文脈では、大きく三つの視点から語られている。

一つは、社会的なコミュニケーションの実体的なツールとして。この場合は、マスコミを含めたメディア組織・企業あるいは具体的でリアルな情報ネットワークが想定されている。この意味での「メディア」という言葉も、明らかにメタファーであるが、既にそのようには意識されなくなっている。また、このような方向でのメディア研究は、真実を伝える社会的使命、権力監視の能力、集団的コミュニケーション・ツールとしての意義、あるいは情報統制・情報操作への批判など、様々な形で主題化され、メディアそのものによって、いつでもどこでも語られている。

二つ目は、身体の認知能力の延長的機能としてのメディア、空間的・時間的な制約を取り除き、「つなげる」範囲を拡張していく技術としてのメディアである。マクルーハンによって明確に規定されたこのようなメディア観は、メディアの機能的な意味と領域を大きく押し広げるとともに、いわゆる「技術による人間の支配」といった批判が、単なる機械的支配のみならず、われわれの生活慣習がメディアによって馴致されていく状況を理論的に解明することに寄与している。

三つめは、最も抽象的な意味での、すなわちメディアの原義に立ち返った「媒介作用」という理論的な規定である。この意味では、原理的メカニズムの解明として「純粋な」理論（記号論理分析）として語られる場合もあれば、それを社会的な領域に適応して、象徴的に構成され、一般化されたコミュニケーションの調整機能をあらわす仲介的概念、例えば、権力（複数の主体の行為調整）、貨幣（交換価値の統制）、法（制度化された社会的規範）等に主題化される場合もある。後者のような概念のメディア的分析は、時代・地域・文化等に応じた社会における人々の関係性、行為調整の方法あるいはその発展形態等の解明に資するところが大きい。事実、歴史社会学は、このような概念の語源を遡及的に分析するといった方法論なしにはありえなかったであろう。

むろん、上述した三者の「メディア」は、現象としてのレベルは異なっているが、すべて何らかの意味で「つなぐ＝伝える＝関連付ける」といった「接続」の機能を正の価値として持っている形式と考えられる。素材としての要素（例えば「ことば」という形象）は、ユニットとしての形式（例えば「ことば」という記号）へと転換されることによって意味（＝接続可能性）をもち、接続関連体（例えば「ことばはすべてメタファーだ」という文）の継続的生産が保証される。

しかし、他方メディアは接続の機能と並行して、そこでは接続されていないものを切断して

いる、とも考えられる。すなわち、選択され関連付けられたものは「接続」されるが、その明示化された選択は、逆に他の可能性が「選択されなかったもの」であることを確定し、(潜在的な接続可能性を残しつつも)一時的には「切断」された状態においている、と見做すことができる。

このメディアの接続(あるいは切断)という作用は、基本的に、前節で述べた広い意味でのメタファー機能に支えられている。というのも、メタファーによる意味の集約と拡散(同一化と差異化の二重性)がなければ、異なる(同一性を保証されていない)表現あるいはユニット間の、関連付けは不可能であるからである。ということは、そこには接続も切断も明確に現れることはなく、ある表現は、それ自体の意味から展開されることはなく、可能なのは繰り返しと反復であり、付加的な情報価値の生れないトートロジー、すなわち、単なる「コピー」となってしまうと考えられる。この文脈においては、コピーはメタファーの対立概念となる⁶。

いずれにせよ、ここにおいて、すなわち「同一化と差異化」および「接続と切断」という二重性の機能的な連動という意味において、メタファーとメディアの相互的な関係性が、よりはっきりと浮上することになる。「メディア」は、いわば「接続と切断」という既に可視的になってしまった現象を意味する。それに対して、「メタファー」は、「接続と切断」を可能にする意味の二重化のメカニズムを、構造として理論的に説明する概念であり現象でもある。いわばメタファーは事前ないし内部を強調し、メディアは外部ないし事後を表現している、それ自体が「メタファー」である。「接続と切断」の二重性ないし相互的な関係を前提とするならば、両者の現象の連続的な交代によって、ある表現の観察と記述の継続、言い換えれば、オートポイエーシス的な自己再生産が可能になるとシステム論は考える。このメカニズムに関しての原理的考察へは、後ほど立ち返ることとして、ここではその具体的な事例に着目してみる。

IV. 具体的事例

以上の理論的な展開に対応する、テキスト・作品等における具体的な事例と考えられるものに関して、主たるものを、概略的ではあるが、いくつか挙げておく。まず物語創作等の文学に関するものとして、近現代ドイツ語圏文学(トーマス・マン、ムジル、カフカ等)における世界把握の方法及び物語の組織化としてのメディア機能をメタファーに認めることができる。より具体的にいえば、①メタファーのもたらす意味の二重化を二元的な座標軸に置き換え、対象認識の差異化と同一化の基準としつつも、状況に応じて両方向へと展開(接続)する可能性を保持するといったメディア機能(マンにおける二元化を軸にした物語世界の構築)、②比喩を効

6 「メタファーとコピー」——これは一つの生産的な分析を可能にする概念枠となることを、控え目にも、提案しておきたい。

果として作用させるのみならず、その構造原理への考察を物語自体へ挿入することにより、観察レベルを移動しつつ接続可能性の多層的な（ゆえに決定不可能な）選択肢に埋め尽くされたテキストを生産するメタファー（ムジルにおける物語自体へのイロニー＝距離感の機能）、③メタファーによって世界が可視化された後に、その可視化がさらに二次観察されることにより、再び不可視（可視化の不可能性のパラドクス）の状況へと反転され、その循環が無限に連鎖することで物語が成立しているカフカの（メディアの負の作用による）切断世界等が、その典型的な事例である⁷。メタファーのメディア的機能は、他にも、現代の実験的文学、あるいは近代の西洋文学と意識的あるいは無意識的に対峙した夏目漱石から村上春樹に至る日本文学のテキストからも取り出すことができる。

次いで、批評テキストの領域では、旧来の慣習的なメタファーによって構築された象徴的な意味の連関を、切断を主たる機能とするメタファー（＝アレゴリー）によって解体し、その廃墟から逆説的に救済の徴（接続的なメディアの可能性）を引き出だそうとするベンヤミン。この力技が、現代にも多大な影響力を残しているのはよく知られている。あるいは、ポスト・モダン思想に倣い、再帰的に自らを含む形で対象の脱構築を試みるド・マンの文芸批評の方法論も、極めて意識的なメタファーのメディア的な用法である。これらの展開には、メタファーの持つ二重化・パラドクス・トートロジーによる一時的テキスト切断操作のテクノロジーと、そこから逆説的にリアリティと意味の再獲得へ、すなわち接続へと反転させる文芸批評の範例、換言すれば、批評のメタファーによるメディア的使命実現の範例を見出すことができる⁸。

他方、宗教聖典とその解釈に関しては、伝統的（レトリック的）なメタファーの背後に、継承されてきた解釈の積み重ねによる意味の重層化と、それらの忘却と想起の繰り返される振子的な再生の仕掛け（ユダヤ教のカバラ）、あるいは解釈の規範化によるメタファーの固定化の試み（キリスト教における解釈学）などが抽出される。これらは極めて長期間にわたって蓄積されてきた解釈安定化の方法論、本来ならば極めて困難であるはずのメタファーの飼い馴らしの実例とも考えられる⁹。

その他にも、哲学・思想テキストにおいては、自己言及するメタファーへの批判的とも肯定的ともつかぬ脱構築テキストを標榜するデリダの戦略的身振り、見るもの見られるものの構図が必然的に抱える主客関係からの脱却を試みるフッサールの現象学のテキスト等にも、メディア的機能によって支えられると同時に、切断と接続の連続的繋がりを保証する構造的な原理と

7 トーマス・マンにおけるメタファーと物語の構造化に関しては、以下の拙論を参照されたい。『「メタファー」と「メタ思考」』（メディア・コミュニケーション研究第58号、2010）。

8 ベンヤミンにおける救済とアレゴリーに関しては以下の文献を参照されたい。ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源（上・下）』（浅井健二郎訳、ちくま文庫、1999）

9 ユダヤ教におけるカバラ伝承の機能的意義については以下の文献を参照されたい。シュロモー・サンド『ユダヤ人の起源』（高橋武智監訳、浩気社、2010）。

してのメタファーの役割を認めることができる¹⁰。

しかし、何よりも一部の社会学（社会理論）的記述は、このテーマにとって、分析視点としても、また分析対象としても重要な意義を有している。特にニクラス・ルーマンにおける社会システム理論の構造は、一方において「メタファーとメディア」の二重化およびその二重性の両者間の往復（「振動」）作用の原理を対象化し説明していると同時に、そのメカニズムを、明示的に自らの構成原理として取り入れ、その自己言及的な構造からくる現象をテーマと化しているからである。このことについては後述する。

最後に、近現代の（メディア）アートについても触れておけば、例えば日本のアニメ作品に見られる「遠さ・近さ」を媒介するメタファー的二重化表現、近代から現代にかけての西洋音楽の創作・批評・記述におけるメディア化とそのメタファー的表現の相互関係、また変貌の原理としての両者の機能、あるいは絵画芸術のメタファー的記述の慣習化と「接続／切断」切り替えの制度化、これらは視覚のメディア化とそのメタファー的な解釈技法の展開に大きな役割を果たしており、先にあげた理論的な成果の特徴の具体的な現象として見る事ができる¹¹。

V. システム理論と「メタファー・メディア」関係

ルーマンのシステム理論によると、観察・コミュニケーション・記述といったすべての社会的オペレーションの基礎的単位にあたるのは「システム／環境」差異化である。観察者は、世界に境界線を引き、一方（＝システム）を指示することで、何らかの対象を可視的にし、他方（＝環境）を、一時的にせよ、そこから区別（＝非対象化）する。この「システム／環境」差異化の観察は、当該の差異化それ自体（＝一次観察）にとっては不可視であり（というのもその差異化自体が、他の差異化からその段階では区別されていない）、対象化するためには新たな境界線と差異化による観察（＝二次観察）が必要となる。その際、観察するものが何らかの意味（メタファー！）で同一性を確保されたシステムである場合は、そのシステムの中に、一次的「システム／環境」差異化が再参入（リエントリー）する再帰的＝自己言及的な構造となる。この差異化の入れ子を原理としながら、「情報・伝達・理解」の三極における選択である「コミュニケーション」の連続的自己再生産（＝オートポイエシス）が「社会」と定義されている¹²。

ところで、このコミュニケーションにおける差異化（「同一／非同一」、「自己言及／他者言及」の差異化）は、近代以降においては、その境界線（差異化の基準）が社会的機能に応じて統一化される場合があり、その結果生まれたのが「機能分化社会」とされる。この機能ごとに分化

10 デリダの前出書を参照されたい。

11 例えば以下のようなアニメ作品。新海誠「ほしのこえ」（2002）における「遠さ・近さ」の描き方。

12 社会学においては「包摂と排除」という観点からの記述方法も一般化している。以下の文献を参照されたい。好井裕明編『繋がりと排除の社会学』（明石書店、2006）。

したコミュニケーション・システムにおいては、統一化された差異化の境界線が、機能分化したコミュニケーションを主導する二元的コードとなり、その現実に適合した操作はコードの下位基準とされるプログラムによって行われる(例えば、法システムにおいては、「合法／非合法」が二元的コード、その境界を判断し決定する方法論——司法における法解釈・判例等——がプログラムとなる)。むしろ、そのプログラムにおける具体的な適応＝機能システム・コミュニケーションにおける二元化の基準に関しては、意味の転換・接続・切断等の不確実性が介入する。この不確実性において効力を発揮するのが、メタファー的な意味操作のメカニズムと考えられる。

ルーマン自身は、この点に関して明確に関連付けているわけではないが、例えば、システム論における「複雑性の縮減」という概念は、あらゆる要素の接続可能性を絞り込む操作を意味するが、これは蓋然性が高い接続へと(一般的に理解可能な観点によってある表現を接続可能な意味のユニットへと)転換するメタファー的なメカニズムであると考えられる¹³。その際、「縮減」を可能にする複数の対象の意味の同一視、あるいは非同一視は、事実上メタファーの機能がなければ不可能だと考えられる。このことは言語社会学における以下のような記述と対応する。

「言語とは、そのそもその設計によって明確かつ限定された機能を持つ道具のようだ。

(…中略…) 私たちが概念を無限に組み合わせることによって、(…中略…) 互いに伝え合い、理化し合うことを可能にしてくれる。だが一方で、言語は世界をデジタル化することによって、滑らかで多次元的な経験の質感に関する情報を捨ててしまう『損失の多い』媒体でもある。(…中略…) それにもかかわらずメタファーは筆舌に尽くせないことを表す術を提供してくれる。」¹⁴

加えて、システム理論にみられるメタ理論的な視点、すなわち「差異化/同一化」差異化のメカニズムにもメタファーの二重化作用を重ねることができる。この二重化は水平的なオブジェクト・レベルにある対象にのみ適応されるわけではない。自らの観察レベルをも巻き込んでいく自己言及的、二次観察的なものである。この構造は、理論的には必然的にトートロジー(同一性の繰り返し)、あるいはパラドクス(メッセージのオブジェクト・レベルとメタ・レベルでの相互否定)を含む論理上の不整合を生む可能性がある。しかし、逆に、それゆえに、「メタファーによるメディア機能」がリアリティを獲得するとも考えられる。すなわち、ルーマンの言葉を

13 これは一般に「接続・包摂・コミュニケーション」側がプラスの価値を帯び、記述において優位性を獲得していることと関連する。合意形成、異文化共生、平和等も同様。

14 ピンカー、スティーブン：『思考する言語(中)』(幾島幸子・桜内篤子訳)、NHK出版、2009、222頁。

借りれば、コミュニケーションは論理的な整合性を保証されているものではなく、むしろ「現実」においては頻繁に現れるそのような論理的な不整合を隠蔽（例えば「主題化しない」、あるいは無害化（例えば「時間的な距離を置く」）しつつ、自らを再生産するオートポイエーシス・システムである。

メタ理論的に見れば、「差異化/同一化」差異化のメカニズムそれ自体にも、メタファーの二重化の現象が適応される構図がここに明瞭にあらわれている。このことは、接続機能（一般にプラスの価値とされる）と表裏一体の関係で、潜在的には切断機能（一般にマイナスの価値とされる）が存在していることを理論的に表している。すなわち、差異化の操作とは、常に二次観察へと移行しつつ、すなわち前段階の観察を対象化しつつ進行することを表している。ただし、そこで論理的に現れる破綻の可能性に関しては、それを表面化させてコミュニケーションの継続を阻害することがないような方策——コミュニケーション的な方法論の蓄積がすでにあるということである。その要になっているのが、メタファーとメディアのそれぞれの二重性の組み合わせという方策である。

このような構造は、ルーマン以外の社会理論においても見ることができる。例えばハーバマスの社会理論においては、仮想敵としてのシステム（合理性）対コミュニケーション的合理性、あるいは了解志向のコミュニケーション対戦略的コミュニケーション等の対比が見られるが、その差異化、コミュニケーションの区別、二重化と観察のレベルの移動等に、やはりメタファーの二重化の使い分けを見ることができ、その構造がテキストの接続機能（メディア化）と連動しているのである。ルーマンの理論が特殊なのは、繰り返しになるが、このような状況そのものが対象化されると同時に、自らの理論を可能にする自己言及構造であると明示している点にある¹⁵。

VI. 理論的考察の展開

言語による世界の分節化の「恣意性」を強調したのはソシュールであったが、その恣意性という概念は、ルーマンのシステム理論においては「偶発性＝コンティンジェント」にある程度対応する。「ある程度」という保留は、理由がある。すなわち、ソシュールにおける分節化の境界線およびルーマンにおける差異化の境界線に関しては、両者とも「必然性はない」という点では一致する。しかし、ソシュールの場合と違い、ルーマンの場合には、その偶発性のコミュニケーションにおける観察者相互の関係が強調されている。いわゆるパーソンズに発する「ダ

15 ウェーバーにおける「価値合理性」、ハーバマスにおける「コミュニケーション的合理性」にもこれらの自己言及性は、明確に示されていない。また、この点とメディア（歴史）社会学との関連については佐藤卓巳の研究が示唆的である。

ブル・コンティンジェンシー」の状況であるが、ルーマンはこの二重の偶発的な状況こそが、相互コミュニケーションの起動力および継続を駆動するメカニズムであると、機能的意味をプラスに反転させている。

差異化の基準である「同一/非同一」の区別の観点は恣意的なものである。が、ルーマンの観察概念は、この恣意性をコンティンジェントなものと規定し、それを梃子にして「システム/環境」差異化の要請へと転換する。これによって、双方の観察者それぞれがコミュニケーション操作（「情報・伝達・理解」の選択）へと仕向けられる。コミュニケーションが連続的に再生産させられる要因と捉えるのである。その継続の要となるのは理解の場における「情報／伝達」の差異化、そこに接続の可能性を探る意味の選択である。第Ⅲ節で論じたように、創造においてはこの選択が物語世界の構築のために利用される。あるいは宗教的なテキストにおいては、解釈の方向性を規定するものとして機能する。

近年の認知心理学におけるコミュニケーション概念にも、同様の発想を見ることができる。マイケル・トマセロは『コミュニケーションの起源を探る』の中で、「コミュニケーションの協力モデル」というものを提唱しているが、このモデルは複数の主体間にある互いのギャップの意識こそが、それを埋めるという協力関係を要請し、ひいてはコミュニケーションへと繋がっていくことを説明するモデルである。この構造を、この本の訳者は解説で、以下のようにまとめている。

「第3章では、人間のコミュニケーションの協力モデルの概要が紹介される。発信者の意図していることとそれを伝えるために使われるコード（言語や身振り）の間にはギャップがあって、受信者がそれを埋めることができないと、コミュニケーションは成立しないという点がまず指摘される。その上で、受信者がギャップを埋めることができるのは、共有志向性のプロセスを含む、人間が種に固有な方法で互いに協力し合う能力を持っているからであるという提案がなされる。」¹⁶

先に述べたように、本考察においては、「人間」の「種に固有な方法」という観点には留保をつけざるを得ない。しかし、理論的には、ルーマンにおけるコミュニケーション構造の理解が、認知心理学的にも補強される記述と考えられる。ここでいう「協力」とは、ルーマンのいう「コンティンジェントであるが故の、その克服への志向性」、すなわちコミュニケーションの続行のための操作の選択である。そしてその継続とは、接続志向性、つまりメタファー的な意味の二重化の志向性と符合する。ただし、前述したように、ルーマンは実体論に根拠を求めるのでは

16 トマセロ、マイケル：『コミュニケーションの起源を探る』（松井智子訳）、訳者解説とあとがき、勁草書房、2013、314頁。

なく、あくまでも観察によるコミュニケーション・システムの継続＝自己再生産という文脈から、可能な限り説明し尽くそうとする。おそらくこのことは、どのような実体的な考察も、メタファー的な複雑性の縮減の枠内において、すなわち観察の記述の選択に転換されざるをえないという理由によるものと考えられる。

コンティンジェントなもの、恣意的なものは、メタファーによって選択肢を与えられ、縮減される。これはシステム理論でいう二元化（＝「システム/環境」差異）となり、そのコード化は、コミュニケーションの機能分化を推進する象徴的メディアを生む。機能システムにおけるメタファーは、ここでは、プログラム適応の具体的な方法論となる。メタファーとメディアの二重機能が潜在的に抱える理論的不整合性に関しては、パラドクスあるいはトートロジーの無害化という形で、あくまでもコミュニケーションの継続が優先される。その際、システムの再参入＝入れ子構造が大きな鍵となる。ここから展開されるのは、実体論に基づく主体客体構図ではなく、あくまでも差異に基礎を置くコミュニケーションの自己言及、連続する再生産である。この再帰性において、観察は、常に先行する観察を観察する二次観察へと移行し続け、自己言及と他者言及を振り子状に横断する（振動する）。このような構造が、システム論の言葉をかりた、メタファーとメディアの基本的な協働メカニズムと重なる。ここに現れるのは、実体に基づく存在論から可能になる客体的世界ではなく、メタファーによる観察がもたらすメディア的な構築物、すなわちコミュニケーションによって可視的になる社会関係である。一見、主体的意思に還元できそうな恣意性は、逆説的に、オートポイエーシスの理論的優位を告げることになる。いわゆる構築主義的世界観であるが、メタファーとメディアの相互関係が、その基礎にあると考えられる¹⁷。

VII. 結語

当初、主題として、また仮説として設定した「メタファーとメディアの関連性・相互依存性」という基本的な命題は、理論的考察においても、また具体的なテキスト（ないし作品）の生成・受容の場の分析においても、十分な妥当性を認めることができるのではないかと思われる。特にその論理的構造は、現代の社会学的な理論においてパラレルなものを見出すことができる。むしろ、この関係性は、実は形や言葉を変えながら、現代の様々なコミュニケーション形態に認められる。これは、現代のメディア文化あるいは情報メディアといわれる状況が、論理的に新たなものを提供しているというよりは、メタファーが本来持つ「差異化・同一化」構造とメディアの「接続・切断」機能との組み合わせが、その可能性の幅を大きく広げていったことによるものだと考えられる。メディアの機能である接続と切断は、実際（主体の分析から離れた）

17 ルーマンは自らのシステム論を、いわゆる〈構築主義〉に属するものと捉えている。

コミュニケーションの自律性を際立たせ、その分析を誘発している。現代社会のコミュニケーションは、機能分化システムにリードされ、差異化基準の同一性の維持の傾向にあるとするシステム論的見解はその一例であろう。理論的には、二つの二重化は、オブジェクトとメタの階層性にも適応されれば、論理的な不整合、すなわちパラドクスあるいはトートロジーが現れうる。これは、メタファーの機能が〔同一性/非同一性〕差異から〔〔同一性/非同一性〕差異/〔差異化/同一化〕差異〕差異へと二つの階層を同時に抱え込む時である。しかし、実際のコミュニケーション場では、それらは「遅延」され、回避される。しかし、この一見不整合な絡み合いが、逆にリアリティ獲得へと寄与しているのは、極めて示唆的である。現代という二次観察の社会は、このような偏差を飲み込むことで、ある種の安定化へ向かっているからであろうか。

〈本論は科学研究費（基盤研究C、2010～13年度、「メタファーとメディアの相互性に関する研究」、研究代表者：鈴木純一、課題番号22520290）のもとでおこなわれた研究報告にもとづいている。〉

(2014年11月26日受理)

《SUMMARY》

Consideration about a relation between metaphor and media
—“Connection/separation” and “identity/difference”

Junichi SUZUKI

This study is based on the functional similarity of metaphor and media. On the other hand both of them connect the various meaning, and on the other hand both of them also separate the connected meaning. The first purpose of this paper is to analyze the interdependency of these two functions theoretically, and the second purpose is to make the relation between these mechanism and text interpretation clear. Several text about philosophy, thought, literature, aesthetics and criticism is analyzed here. In particular text of German sociologist LUHMANN plays the double (recursive) roles as a theory of analysis and as a target of analysis. This duality seems to be a tautology or a paradox. But it makes the function of media by metaphor and also the metaphor-like function by media possible. Though logical contradiction is included, this relation supports the paradoxical structure by metaphor and media.